

はじめに

## 人と人とのつながり

地域活動実践センター長 重村 幹夫

「鮭」で有名な高橋由一（文政11年－明治27年）は、日本の近代油画の基礎を築いた重要人物の一人である。彼は、晩年病床にある時、息子源吉に回想録『高橋由一履歴』<sup>1</sup>を口述筆記させた。これは、当時の油画事情を窺い知る事の出来る史料であるが、その内容は実に愉快である。

由一は生まれつき病弱で、家業の武術の教導を継ぐことは出来なかった。ある時、洋製石版画を観て絵の道に進みたいと思ったが、なかなか学ぶ機会が無かった。八方手を尽くし、知人に幕府の洋学研究機関である洋書調所画学局への紹介を「雀踊ノ余り厚ク」委託し、文久2年に入局がかなった時は、「天ニモ昇ル心地」であった。当時は、「天ニモ地ニモ」油絵など観ることが無かったが、先輩局員が石版画を模写した油絵を観て、局員に「迫リテ」その画法及び絵具の調製法を「丁寧反復」口述を受け、「ヨロコバシサ限りナキ」であった。それ以来、溶き油は、日本在来の<sup>えの</sup>荏油に鉛を混ぜて太陽に数日間晒した。絵具も在来の<sup>うるしへら</sup>顔料を漆罫や西洋包丁を削った物で練り上げ、キャンバス張り器にはせんべいを焼く鉄の焼形を加工して用いた。その後、使節船が海外から持ち帰った油画画材が画学局に来た時は、皆自分の物ではないにもかかわらず喜び限りなかった。

慶応2年には、横浜に赴き、油画を学ぶため英人チャールズ・ワグマンに入門するとともに、油画博物館の構想を持った。実際の博物館活動の素地は明治6年のウーン万博参加以後のこととされているから、由一の構想がいかに時代に先んじていたかわかる。明治3年には、画学場の設置、学校・展覧所・売却所からなる総合油画会社設立を構想。明治9年、絵具屋に画学局の元同僚の化学者を紹介して油絵具の製造を指導した。

以後も実に旺盛な活動を晩年まで続けている。このように、由一の活動は自身の油画技法の習得にとどまらず、当時の油画画材事情に対応した画材の製造販売、画学場による教育、展覧会の開催など、油画の振興のため多方面で活躍し、その生涯をささげたものであった。由一のバイタリティー溢れる活躍は、油画への情熱とともに、多方面の人脈を駆使した企画力があつてのことであった。

地域活動実践センターは、平成18年に発足した。その設立趣旨について、本誌“SOCIOUS”の創刊号には、「地域活動実践センターは、建学の精神『仁愛兼濟』を实践するため、短大が保有する知識等の資源を地域社会に提供し、地域社会の発展と文化の向上に資するためにある。それは、産業や行政をまきこんだネットワークをベースとする教育プログラムを構築し、地域をキャンパスとする教育活動、地域をフィールドとする研究活動の展開を通して全体の活性化を計ろうとするものである。」と記されている。

由一の時代とは異なり、現在は物や情報が溢れている。しかし、人と人とのつながりの中から新しく物事を企画、実践していく知恵と情熱の大切さは変わらないであろう。

(Endnotes) 1 青木 茂編、「高橋由一油画史料」, 中央公論美術出版, 1984.